

第3セッション 質疑応答

弘末雅士(立教大学) 水上さん、興味深いお話をありがとうございました。先ほど林先生からコメントが出ていましたが、一般の人びとの洪水の受け止め方について、とくに私がお話のなかで興味深いと思いましたのは、最近は渇水の状態にあって、一般の人びとにとっては、洪水よりは日照りのほうが困るということです。そうすると、現在の日照りの状況と、前の洪水とを関連させて、それを人びとはどのように考えているのか。おそらく地域的な差異もあると思うのですが、とくにチェンマイにいらっしゃるので、お教えいただけないでしょうか。

森田敦郎(大阪大学) 2008年にもこれの前哨戦みたいな水害が起こって、アユタヤのバーンバーン郡を水没させています。今回の洪水は、私の印象としては、これまでずっと「起こるな」という予感が高まっているところに起こったという感じがあるのです。そういう前哨戦的なものは、政治的な対立などにどのような影響があるのかをお聞きしたいと思います。

バーンバーンでいろいろ対立が起こったときは、バンコクを守るためにどこかを代替的に沈めて、そことバンコクとの対立が起こると予想していました。実際にはそれをはるかに上まわる事態だったので、そういう単純な図式では言えないのですが、これまで繰り返されてきた前哨戦的な洪水と、今回起こった洪水に何か関連することがあれば教えてください。

もう一つ、細かいことですが、そのときからたしか洪水マスタープランを作らなければいけないという話があって、アピシット政権のときに、何か作ったか、作りかけたものがあったような気がします。そういうマスタープランがないという状況は、やはり政治的な混乱とかなり関係しているのか、それともマスタープランみたいなものをきちんと作ってすることは政治的にそんなに期待できない状況なのか。そのあたりについても教えていただければと思います。

片岡樹(京都大学) 少し説明されていたと思いますが、もう一回確認したいことがあります。お二人とも、インラック政権と王党派との間で一定の妥協が成立したという点について意見が一致していたと理解しています。インラック政権の側が王党派との妥協を迫られた理由はよくわかるのですが、なぜ王党派が民主党を見限ってプアタイに乗り換えたのかを、もしそうなのであればもう一回ご説明いただきたいと思います。

それに関連して、今後は赤い人と黄色い人が、ともにプアタイを支持して民主党を支持しなくなるのか、そういう展開が生じるのかについてご教授ください。

■ 農業地域とバンコク近辺とで異なる 洪水に対する受け止め方

水上 まず一般の人びとの洪水の受け止め方ですが、私がいる北部に関してはそれほどの水害ではなく、チェンマイでは1週間たったら洪水は引いたわけですが、農業地域だと水浸しで、コメがだめになったとかいう被害がありました。農作物の被害補助が出ますので、たいした被害ではなかったという感じがします。東北地域になると、しばらく水が引かなかったこともあって、かなり商店などに影響が出ましたが、車が水没しないかぎり、そこまでひどいという意識ではなかったと思います。

とくに今回ひどい被害を受けた、災厄だったと受け止めているのは、バンコクの近くで、水を止められて流れなかった地域です。正直なところ、そこ以外であれば渇水のほうが農民にとっては深刻だという状況が、いまだに続いているのではないかと思います。

それと、大きな問題なのが、チェンマイには雨もかなり降りますが、それでも渇水になる。灌漑設備が整っているところは、水がたまっていればその恩恵を受けられる。そうではない場所は雨が降ろうが乾こうが、結局は自然のなすがままというところがあります。灌漑整備があるかどうかが大きかったのかなと感じます。

■ マスタープランはあるはずだが 抜本的な対策はできていないのでは

水上 次に森田先生から質問があった件で、まず洪水マスタープランについてです。きちんと確認していないのですが、私の記憶では、JICAの支援でかなり進んだものを作ったはずですが、たしか2年ほど前だと思います。それ以前にも、災害を軽減するような国際協力のプロジェクトがいくつもあるはずなのです。しかしながら、それがほんとうに法的な拘束力をもって実行に移されているのかということ、そこまでは確認できて

いません。なんともお答えしにくい状況です。

2008年の水害があって、予感があってさらにどうなったかというお話ですが、毎年タイでは洪水が起こっていますので、いつかはこういう大災害が確実に起こることは、みんながわかっていたのです。わかっているながらも、何もしないのがタイだと思います。

いちばんの教訓だったはずなのが1942年のバンコク大洪水で、このときピブーン首相は首都開放をしました。これが抜本的な対策なのですが、それ以降は、きちんとした教訓を洪水からほとんど学んでいない。正直な話、小手先としての洪水対策はあちこちでしてきましたが、根本的にタイと水との関わり方を考えることはしてこなかったのではないのかと思います。

■ 民主党政権の弱体化が 王党派をインラックに近づけた

水上 片岡先生からの質問で、インラック政権と王党派の妥協というか和解に関してですが、王党派としては去年の総選挙はとても痛いところで、民主党とプアタイの票数の差がそこまでなければ、無理矢理にでも民主党政権を作るだろうとみんなにらんでいました。

しかしながら、結果を見たらプアタイ党の圧勝だった。どうにも手も足も出ない。しかも王党派は民主党政権をかなり支えていましたので、強制排除の裏側には王室の影が見え隠れするということがあって、王室の人気そのものも危うくなっている。民主党とそのまま手を組み続けていれば、王室そのものも危機に陥るかもしれないという見方があるだろうと思います。

それもあって、これだけの洪水でも民主党政権はインラック政権を追及しきれない。つまり民主党に乗っていたらいっしょに沈む船なので、逃げたということがいえるのではないかと思います。

■ バンコク都と周辺部との対立は存続し 天候任せの状態が続くのではないか

玉田 すでにお答えいただいていますので、補足的に思うことを申しあげます。干ばつと洪水の問題ですが、ものすごく単純に言うと、干ばつになる地域と洪水になる地域は、基本的に地理的に別の空間である。どちらの被害も受けるところもありますが、簡単には違うところだというのがまず出発点になっています。ようするに高いところは干ばつになるし、低いところは洪水になるという単純な話だと私は理解をしています。

森田さんがご質問されたバンコク都の周辺部との対立ですが、これはたぶんずっと過去もこれからも存在し続けることでしょう。かつては「首都対農村部」だっ

たのが「首都対ニュータウン」あるいは今回の場合は「首都対工業団地」になりました。首都と対立するものが「どっちが偉いんだ」という話になったら、じつは工業団地も大事ではないかということをはっきりとしたのが、2011年の洪水です。工業団地ではなくても、従来の農地がいまや宅地に変わっていますので、「都市的な空間」対「都市的な空間」の対立になって、従来のように「農民は黙っておけ」とはなかなか言いにくくなった。

長期的に見れば、たんにお金を払って補償してあげるからいいというのではなく、もう少し抜本的な解決が必要だろうと思います。しかし、たぶんなかなかできなくてズルズルと「今年は洪水にならなくてよかった」というお天気任せの状態が続いていくのではないかという気がいたします。

洪水対策のマスタープランについては、私はまったく存じあげません。

政権と王党派の和解というご質問ですが、王室は泥船に乗っているわけにいかないの、沈まない船に乗るしかない。民主党のままでは沈んでしまうというのが根本的な理由です。ですから、現在の与党が潰れたときにはまた違う選択肢が当然とられます。とりあえず、勝ち馬とは言わなくても、すくなくとも負けない馬に乗ろうという行動で、一言で言えば和解になっているのではないかと思います。

■ 一般の赤シャツ派は プアタイをどのように見ているのか

東茂樹(西南学院大学) 水上さんに質問です。洪水が起こった背景として、タイ政府の縦割り行政や与野党の政治家の有権者を意識した対応があり、インラック首相がリーダーシップをとって適確な対策を採らなかったことが、問題を悪化させた原因に挙げられると思います。その反省を踏まえて、先ほどの片岡さんの質問のお答えにあったように、インラック政権と王党派の両者の上にいる人が手を結んだことはよくわかったのですが、実際には一般の赤シャツと軍との対立関係とか、水上さんが先ほどのご報告で示されたいろいろな対立軸が、今回の上部同士の和解ですんなり全部解決して進むのかということ、を、まずお聞きしたいと思います。

水上 インラック政権と王党派との和解について、タクシン派と王党派の上部同士は和解したけれど、一般の赤シャツの支持者は和解をどう考えているのかについてお話しします。

チェンマイでの私の周りにいる赤シャツ支持者たちは、インラック政権及びプアタイ党に対して不信感

を持っています。先日行なわれたパトゥムターニー県の下院補欠選挙と県行政機構長選挙が典型的な事例です。赤シャツの支持者がプアタイ党の候補に投票せずに惨敗しました。

選挙は赤シャツの支持以外の要素もありますが、プアタイ党は、赤シャツの支持離れに悩まされています。今回の王党派との和解を契機に、プアタイ党と赤シャツの分裂傾向はますます拡大していくでしょう。王党派は、インラック首相、タクシン元首相を身内に引き込んだけれど、赤シャツの一部の人たちは、王党派はタイ民主主義の阻害要因だと見ています。赤シャツの一部は、王党派と手を組んだインラック政権を見放すのは当然です。

■ 洪水対策センターと二つの洪水対策委員会はどうに機能しているのか

東 政治的な対応に関していろいろ教えていただいたのですが、たとえば政府の洪水対策センターでは統合チームとか各種委員会が乱立して、結局は内容のある対応はできていないように思います。先ほどのお話ですと、実際は旧タイ愛国党の111人のメンバーが裏でいろいろと操作して進めて、思惑がらみでいろいろとやったという説明でした。

そのような政治的な対応はよくわかったのですが、洪水対策センターが具体的にどのような対策をバンコクで洪水を防ぐために行なっていて、それが効果があったのかどうか。それから、先ほどのお話だと、王党派と手を組んで、11月にはタイ復興開発戦略委員会、水資源管理戦略委員会という委員会を設置されて対策を打ったとのことですが、その対策の内容をご存じでしたら教えてください。

水上 洪水対策センターが実際に何を決定したのかについては、あまりよくわかりません。何を政府レベルが決定し、裏側にいた旧タイ愛国党幹部が何を期待していたか、内部の事情は外部からはわかりません。

結果的には、スダラットの地盤のバンカピ周辺地域の被害はたいしたものではなかったもので、地盤を守るために何らかの決定をしていたとは思いますが。またプアタイ党議員が関与した政府支援物資に関するスキャンダルも多く出ていましたので、地盤を強化するための決定がいろいろとあったのだと思います。

洪水対策2委員会の決定事項ですが、水資源管理戦略委員会は、まだ具体的にそれほど動いてはいないようです。どのような権限があるのかも不透明です。インラック政権は、洪水対策に関する委員会をもう一つ

新たに最近作りました。事務方に聞いたところによると、王党派の象徴として出てきたスメートですが、委員会の顧問を辞任することはないけれども、会議にはほとんど出席していないようです。事実上機能していない委員会になっているようです。事実上このまま消滅するのではないのでしょうか。もう一方のタイ復興開発戦略委員会は、洪水再保険制度の整備や巨大な予算での防水対策、遊水池の確保などを議論していますので、こちらの委員会はまだ動いているようです。

■ ダムからの放水は洪水にどこまで影響したと考えるべきか

山本博之(京都大学地域研) ダムの放水について、星川さんのお話と水上さんのお話では見解が違ような印象を受けました。解釈の問題であって結局は同じ見解だと理解してよいのか、それともお二人の見解が違っているのかについて、水上さんと星川さんからうかがえればと思います。

水上 ダムの放水がどこまで洪水に影響を与えたのかについては、私は水利の専門家ではないのであまり自信がありません。ただし、タイ国内の雑誌やテレビでの論争を見ている限りだと、ダムの影響は大きかったと語られています。とりわけプミボン・ダムの貯水量は大きいので、ここが放水をする周辺地域や下流域はかなりの影響を受けます。タイ国内一般ではそのように信じられています。

星川圭介(京都大学地域研) ダムの操作というのは、日本でもよく行政訴訟になるくらい難しい話です。まずチャオプラヤ・デルタの洪水状況に与えた影響ということで言えば、プミボン・ダムのよりもむしろパーサック・ダムのほうが直接的な影響は大きかった。チャオプラヤ川の水量のグラフを上流から下流に追って見ますと、10月初旬前後でチャオプラヤのアユタヤの下流あたりですごく水位が上昇するのですが、おそらくそれはパーサック・ダムからの放流が効いているのではないかと思います。そのあとプミボン・ダムからの緊急放流の影響がなかったとは言えませんが、直接的にはパーサック・ダムの影響が大きかっただろうと考えています。

■ 問題があったのは放水操作ではなくルール・カーブの設定ではないか

星川 そもそもプミボン・ダムの操作がミスだったのかどうかと言いますと、工学的な観点から見れば個々の操作の過失は問えないとしか言いようがないということです。ルール・カーブについて見ると、上限カー

ブの上まで貯水位が上昇すると洪水になる確率が何パーセント、下限ルール・カーブの下にくると来年の乾期に干ばつが起る可能性が何%と、基本的にそういうことで計算しているはずで、これらのカーブは、何%の洪水の確率と何%の干ばつの確率を容認するかという妥協点で定められたはずです(資料1-18参照)。プミポン・ダム のルール・カーブが具体的にどのような計算に基づいて定められたかについては資料がまだ手に入っておりませんので、はっきりしたことは言えませんが、基本的にそういう思想に基づいて設定されるものです。

去年の操作に関して言えば、問題になっているのは8月以前の放水操作です。8月の大雨の後、貯水位が急上昇した後は下流でも洪水が発生していて放水しようにもどうしようもない状況だったので、貯水位が急上昇する前にもっと放水していればよかったのではないかというのが論点だと思うのですが、このようなルール・カーブが定められている以上、上限・下限ルール・カーブの間に水位をもっていこうという操作自体は、すくなくとも制度的には責任を問えない話です。

そもそもこのルール・カーブに問題があったのではないかというアプローチは可能だと思います。先ほど話しましたように、ルール・カーブがどうやって設定されたのかということに関しては情報を入手できておりません。そもそも雨季の後期に大量の降雨がもたらされる確率の算定を誤っていたか、雨季の後期にダムの緊急放流の確率が高まることは仕方がないという判断があったかわかりませんが、とにかく雨季の後期に洪水の確率が高くなるような設定をされていた可能性はあると思います。2006年にも同じように雨季の末期に満水になって緊急放流の一手手前という事態が起っていますから、ダム操作に関する日本的な常識からするとかなりの高確率です。

また、ルール・カーブというのは洪水と干ばつの確率の妥協点で決められるわけですが、上限・下限カーブの間の範囲が広がった。なぜこのように広いのかはよくわかりませんが、プミポン・ダムのように大きな容量を抱えている以上、あまりに狭くして手足を縛ってしまうことがかえって不効率だという思想があるのかもわかりませんが、とにかく広がった。先ほど申しましたようにこのルール・カーブをどのあたりで調整するかというところに、恣意なり、政治家の介入なりを招きやすく、またそうしたことが行なわれていると見られる余地があったとは言えます。

■ 洪水は「王の都」としてのバンコクになにをもたらしたのか

西 いまの星川さんと水上さんの議論が出るように、タイの水害というのは、だれがどのように対応すべきだったかをめぐって意見が定まらないというか、議論があることが一つの特徴だと思います。一方で、玉田先生が最後にお話しされた国王の存在をどう考えるか、今回のタイの水害で国王のあり方はなにか議論になったのかということにも関心があります。

というのは、先ほどのお話ですと、バンコクは王の都であり、今回のタイ水害では結局は王の都であるバンコクのあり方が問われたというお話でした。今回の水害そのものに関してかどうかは定かではありませんが、タイの水害は王国としてのタイ、あるいは王の都としてのバンコクのあり方がある程度問い直しただろうという印象を受けました。そのように考えたときに、今回の水害でタイという国、あるいは王の都としてのバンコクのあり方について、新しいきざしとか、どのように考えたらよいかということについてお話があったら、一言お願いできたらと思います。

玉田 洪水対策と国王の関係についてはかなり単純だと思います。王様の助言に基づいた洪水対策をしっかりやらなかったから洪水になった。だからもう一回基本に立ち戻って、王様が何年前におっしゃったとおりにやろうという話なのです。それで失敗してもだれも責任を問われません。だから、それでいこうということになります。免罪符的なものを求めて王様のおっしゃることに従おうと言っているわけです。

王の都だとおっしゃった点についてももう少し補足説明しますと、バンコク中心部のほとんどの土地は王室のものです。たとえば現在の与党の政権公約の一つは、バンコク沖の海を埋め立てて新しい新都心を造ることです。現在の首都バンコクは沈んでしまうから、沈まない新しい土地を造る。カンボジアと領有権を争っている土地よりもはるかに広大である。そこには地下鉄なども通して快適な都市環境を整備する。大洪水を予見していたようなマニフェストでした。しかし、日本の遷都論も同じですが、転出されると中心部に土地を所有している人は困ります。日本で言ったら三菱地所でしょうか。その利害に反することはやりにくいということです。